

午前3時の客

白原さんから、きょうはぼくだけ特別に長い時間をとって分かち合いをしてくださいませんかと言われて、なんか、ものすごく申し訳ないんですけど、セミナーに参加されている皆さんの参考になると思いますし、モーガンのメソッドの正しさというか、有効性というか、そういうのを証明することにもなる体験だったと思いますので、少し、お話しさせていただきます。

話し下手で、内向的な人間で、というと、まさかーと言われるんですが、これは一生懸命に意識してるっていうか、演技しているっていうか。人前で、しかもマイクに向かって

話すのは、たぶん、生まれて初めてです。カラオケ以外では。きょうは話す内容をメモをしてきたので、すみませんが、メモを見ながら話したいと思います。

ぼくは1日コースをきょうを含めて5回受講しています。社会人1年生なので、連続した休みがなかなか取れなくて、ほんとは3日コースを取ってスキルを高めたんですけど、無理なので、1日コースを、えーと、5月に2回、それと6月と7月に1回ずつ取りました。そして今回です。やっぱり基礎を反復することになるので、それはそれでよかったかと思っっています。あ、うち1回は、モーガンさんが来日したときの特別セミナーです。ラッキーでした。

ぼくはヘミシンクを2年くらい自分ひとりで行ってました。あ、ヘミシンク、知らない人、いますか。バイノーラル・ビートって言って、左右の耳から聞こえる音の周波数の差異を利用して、脳波をシータ波にして瞑想状態にするんですよ。それをずっとやっていたので、瞑想状態に入るための基礎ができていたと思います。モーガンも最初はアメリカのモンロー研究所でヘミシンクを体験したのがスタートだったと言ってますよね。

ヘミシンクを聴くようになって、夢をたくさん見るようになって、しかも深い夢というか、夢の見方がなんか変わってきました。朝起きてもしばらくは頭の半分で夢が続いてい

るみたいな、そんな不思議なこともけっこうあるし、夢の続きを見るというか、一回起きて、あ、夢の続き見たいと思って、また寝ると、続きが見られたりとか。映画のDVDを途中で止めて、少し立ってまた再生するみたいな感じですかね。おかしいですよ。金縛りもけっこう経験するようになって、足音が聞こえたり、だれかがそばにいる気配がしたり、そういうことも多くなっただけです。

で、4月に、就職したのをきっかけに引っ越したんです。

普通の3階建てのワンルームマンションで、ぼくは2階の一番端っこの部屋でした。渋谷区の代々木公園のすぐそばで、ものすごく場所がいいんですが、家賃が安かったんです。いわゆる「いわくつき物件」かなと思って、不動産屋さんにしつこく聞いたんですけど、そんなことないです、大丈夫です、って笑われたんで信用したんですが、やっぱりある意味で「いわくつき物件」だったんです。みなさん、不動産屋さんの言うことは信じちゃダメですよ。

引っ越して1週間目くらいに、出ちゃいました。

真夜中に水道の蛇口から水が出ている音が出て目がさめたんです。

最初は夢うつつに、水道が壊れたのかと思って、目をさましたんですが、目がさめて意識がはっきりすると、音は聞こえなくなりました。

時間は午前3時ごろです。いわゆる、丑三つ時ですね。

次の日も、午前3時ごろに同じような音が聞こえて目がさめました。

水道の音じゃなく、なにか他の音かなと思って、起き上がって、部屋中を調べて、それから窓を開けて外を見ましたが、シーンとして何の音もしませんでした。

次の日は会社の同じ課の歓迎会があって、お酒を飲んだせいか、何ごとも無く朝を迎えました。その次の日には、やっぱり同じ時刻に水道の音が聞こえて目がさめました。

ジャーツという小さな音です。ザーツみたいな盛大な音じゃないです。ジャーツとか、シャーっというか、そういう、コップに水を入れるときぐらいの音です。

気がつくとその音が聞こえていて目がさめるわけです。その音に反応して目がさめるのか、目がさめた瞬間からその音が聞こえるのか、その順番はわかりません。

最初は霊的な現象とは思っていなくて、マンションの配管とか何かが立ってる音ではないかと考えていて、それにしてもヘンだとは思いつつも、うざいなあぐらいの気持ちでした。

そういうことが十日ぐらい続きました。

確か土曜日の夜だったと思います。正確には日曜の午前3時です。

久々に金縛りにあいました。金縛りにあったことがある方はわかると思いますが、ふと目だけがさめるんですよ。で、その瞬間に、あ、金縛りが始まるってわかるんです。なんて言えばいいんだろう、しびれるというのとも違うし、独特の感覚があって、あ、体が動かなくなるって思うんですよ。そうすると、もう、何が何でも動かない。自分の意志で自由がきかない。意識はほんとうにハッキリしているのに。

これに似た状態を、ヘミシンクでは、からだは眠っているが意識は起きている状態といえます。おそらく、肉体からの感覚信号が脳に來ないし、脳からも肉体へと出ていかない状態で、だから、体を動かせないんだと思います。だのに、意識だけははっきりしているんです。もう、いま、こうしてお話しているときと同じ自意識というか、自我意識というか、そういうのをはっきりと持っているんですよ。

で、金縛りにあったと同時に、あの蛇口から水が流れる音も聞こえてきたんです。しかも、こんどはキッチンの流しに人が立っている気配がするんです。

ぼくの部屋は一般的なワンルームで、外に面した通路から玄関に入ると短い廊下みたいになっていて、すぐ右側にはトイレとバスルームがあって、それに面したような形で左側

に小さなキッチンがあるんです。

ベッドは窓に頭を向けて、こう、壁にそって置いてあります。だから、寝ていると下目でキッチンが見えるんです。わかります？

つまり、目をさますと、こう薄目になりますが、その状態で最初に目に入るのがキッチンのほうなんです。

そのときは金縛りにあっていますから、目を開けることもできなかったんですが、だれかがいるという気配だけははっきりと感じました。

なんとか体を動かそう、目を開けようと、一生懸命に意図したら、自分を縛っていた縄がズルズルと解けていくようなかんに自由がきいて、まず目が薄目状態になったんです。そうしたら、いたんです、男の人が。ひよろつとした体つきの、彫りが深い、こう鼻が大きい男の人が、グラスで水を飲んでいたので、キッチンで。

うーって暴れるようなかんにさらに意図するとやっと全身が動いて、そうすると、その男の人は消えました。

なんだったんだ、いまのはって、鳥肌が立ちました。夢かと思いましたが、明らかに意識ははっきりとしていたし、うす暗いキッチンの流しの前でグラスに注いだ水をゴクリゴ

クリと飲んでいたその姿は、薄ぼんやりとしてはいますが、確かに見えたんです。黒いタートルネックのセーターを着ていました。

これが最初の出会いといえますか、ファーストコンタクトといえますか、生まれて初めて見た亡霊です。

2

自分の姿を見せて気がすんだのか、それから1週間ばかりは、水道の音もしませんでした。ようやく熟睡できる夜が続いたと思ったら、ところが、また、現れたんです。

土曜の真夜中、つまり日曜の午前3時です。

金縛りになったところまでは最初と同じですが、こんどは水を飲み終わった後、そのグラスを持ったままぼくのほうに向かって歩いてきたんです。歩くと言うより、滑ってくる

みたいなかんじです。

ほんとうに恐ろしかったです。金縛りから抜けようと、一生懸命にからだ全体で暴れようとするのですが、なかなか解けず、男がぼくのかたわらに来て見おろした瞬間に、やっと金縛りが解けました。そのとき、目が開いたんです。ということは、ぼくは目を開いていたつもりでも、目は閉じていたんですね。だから、肉眼で亡霊を見ていたということではないんです。

じゃあ、どこで見ていたんだときかれると困るんですが……。肉眼で見ていたのとまったく変わらないんです。うす暗い部屋の中で、といっても、ぼくは真っ暗なのがイヤなので、コンセントに5ワットくらいの非常灯をさして、それなりにものの形やディテールも見えるんですが、そのうす明かりに照らされた男が水を飲んで、それからデカイ鼻とギョロリとした目をぼくのほうに向けてゆっくり滑るように向かってきて、そしてぼくの顔を真上から見おろしたんです。それは肉眼で見ているのとまったく同じ見え方でした。だから、目をつぶっていたということに、自分でもビックリしたんです。

怖いなんてもんじゃないです。しばらく胸のドキドキがおさまりませんでした。部屋中の電気をつけて明るくして、ラジオもつけて、朝まで起きていようと思いましたが、知ら

ないうちに眠っていました。といっても1、2時間ぐらいたと思いますすが。

朝日が差しこんで世界が明るくなると、恐怖というのは色あせていくようで、だんだん冷静に振り返ることができるようになるんですね。そのとき、モーガンの本を思い出したんです。『死後探検記』です。モーガンはたくさん死者をリトリバル、つまり救出するじゃないですか。日本風に言えば地縛霊のところに出かけて行って、フォーカス27の世界の助けを得て、死者を救出してフォーカスが上の世界に戻してやるじゃないですか。それを、ぼくもしなくちゃいけないのかなって思ったんです。この鼻のデカイ、ひよろりとした男性が、いわゆる地縛霊だとしたら、救出してあげなくちゃいけないのかなと。

あ、フォーカスというのは、ヘミシンクを開発したモンロー研究所で使われている概念で、次元のようなものと思えばいいんじゃないでしょうか。いちおうフォーカス21というのが死後の世界との境界ということになっていて、地縛霊とか、日本風に言えば浮かばれない魂はフォーカス23のあたりにいるようです。フォーカス27がいわば地球世界の天国というか、なんといいいますか、死後、ここに来て、また生まれ変わるか、生まれ変わらなくても上のフォーカス、上の次元ですね、そこに行くかどうかをここで決めるんですね。

話を戻します。

で、水を飲みに来る男を救出しようと思ったぼくは、ネットでモーガンのセミナーを調べてみました。そうしたら、ちょうどゴルデンウィークにモーガンが来日して特別セミナーをやるというので、基礎1日コースをすぐに申し込んだんです。

確か、4月の20日頃だったと思うんですが、セミナーは5月1日でしたので、待ち遠しいというよりも、それまでにまた亡霊が現れたらどうしようかと、そっちのほうの実は心配でした。

案の定といいますか、それから3日後ぐらいにまた現れました。

夜、5ワットの非常灯だけでなく、デスクの上のランプもつけて眠るようにしたんですが、すると、こんどは夢の中に出てきたんです。

リアルというよりは、実感がある夢といったほうがいいんでしょうか。ぼく自身は半分、今見ているのは夢なんだと意識しているんです。

夢の中で、その男がぼくの部屋に入ってくるんです。ぼくはデスクでなんかの書き物をしていて、振り返ると、玄関にその男がいるんです。黒いタートルセーターを着て、ひょろりとして、大きなわし鼻と大きな目をして、七三ぼくわけてふんわりと撫でつけたよう

な髪型で、カッコいいと言えば、カッコいい男でした。夢の中での年齢はよくわからなくて、二十代ともいえるし、三十代ともいえるし、四十代ともいえるという感じですよ。

その男が歩いてくるんです。なんか、うれしそうに。ニヤリとして。

ぼくは怖いことは怖いんですが、金縛りにあったときほど怖くない。ただ、ぼくの夢の中に亡霊が侵入してきたと考えているんですね。で、説得して出て行ってもらわなきゃと、ぼくは思っているわけです。

ぼくはモーガンのリトリバルのことを夢の中で思い出して、こんなことを男に言いました。

ここはあなたのいるべきところじゃない。外に出ると光の階段がありますから、そこから上に行くってください。

そんなことをしきりに言うんですが、男はちっともわかってくれません。ぼくに向かって、ここはオレの部屋だと言い張ります。

家賃は今ぼくが払っているもので、とにかく出てください、お願いします。そうぼくは言います。夢の中でも必死ですが、怒らせちゃいけないと、ていねいに言うんですね。

すると、男が、違う部屋かもしれないので、とりあえず、出る。そう言って、外に出て

行きます。

ぼくは、ようし、出て行ってくれた。もう夢から抜け出ても大丈夫だ。そう思ったら、実際に目がさめました。

うす暗い天井を見ながら、やっぱり、あの男はこの部屋の元住人なのかなとぼくは思ったのですが、どうも、何かが違う。夢を思い出してみると、ぼくの部屋は2階のはずなのに、男がドアを開けたときに1階のエントランスホールが見えていたということに気づきました。ま、でも、あまりたいしたことには思えませんでした。

翌日から、また、あの水の音が聞こえるようになりました。

午前3時にです。こうなると、もう、うざいどころじゃなくて、ノイローゼになりそうです。

ぼくはお酒が強くなく、それほど好きでもないのですが、何日かはワインを飲んでほろ酔いで眠りました。お酒が入った状態で眠ると水の音は聞こえませんでした。毎晩、お酒を飲むのははばかれました。気分が悪くなるんです。

そして、待ちに待った、セミナーの日がやってきたわけです。

皆さんと同じで、最初にモーガンの座学があり、そして、呼吸法、リラククス法、天と

地からエネルギーをもらう法、それをリング型のバリアにする法などを習いました。

それから、実地に死者にアクセスする方法を習って、皆さんも経験したように、ぼくも参加者の亡くなっている知人、つまり、ぼくが知らない死者にアクセスしてみるという実験をしました。やはり、大勢でやるとエネルギーが違うので、1回目からうまくいきました。それで、自信が出て、ようし、家に戻ったらさっそくリトリーバルするぞと思ったんですね。

それが5月1日です。そうそう、その日はモーガンさんに本にサインしてもらいました。

3

5月1日はやはり疲れたのか、リトリーバルもせず眠ってしまいました。その夜は水の音も聞こえず、熟睡できました。

翌日は、眠る前にリトリーバルをしようと朝から考えていました。会話をノートにつけたほうが良いと思いましたので、専用のノートを買いました。

そして夜の11時。ベッドに横たわって、瞑想状態に入りました。

あの水を飲む男を想像し、イメージを額の裏側のあたりに映し出し、質問を始めました。モーガンが言っていたように、最初は一人芝居でもよいということで、一人芝居を始めました。ご存知だと思いますが、一人芝居を無意識に行っているうちに、しだいに実際のコンタクトが始まる。自分が知らないことが会話に混じり出したら、それはコンタクトが成功した証拠だとモーガンは言っています。

瞑想状態からさめたあとに、記憶に残っていることをこのノートに記録しました。ノートを見ると、第1回目はこんな感じでしたね。

あなたは誰ですか。

無言。

なぜここに現れるのですか。

無言。

と、他にもいろいろ質問したのですが、無言というか、一人芝居もできていないありさ

まです。

この夜はそのまま眠ってしまいました。

翌日、お休みの日だったので、昼前に隣の部屋の呼び鈴を鳴らしました。出てきたのはぼくと変わらない若い男性で、大学生のようでした。ぼくが、前の住人について教えて欲しいというと、彼はなんにも不審がらずにペラペラ話してくれました。普通、理由くらい聞くでしょと思いました。

ぼくの前に住んでいたのは普通の若いオシャレなOLさんだったということでした。3年前に彼が越してきたときにはそのOLさんはすでに住んでいたというので、3年以上、いまのぼくの部屋に住んでいたということになります。

ということとは、「いわくつき物件」ではないという不動産屋さんの言い分にも一理あることになりましたが、でも、ぼくは実際、悩まされていたわけで。

彼がここに住んでいる間、知っている限り、事件みたいなことはなかったということでした。

実は自殺や殺人などがあった事故物件を調べるサイトというのがあって、そこではずい

ぶん前に調査済みだったんですが、この近所にはそれらしきものは無かったんです。でも、そのサイトには自殺関係は記載されにくいということを聞いていました。つまり、部屋の中でではなく、どこか違う場所で自殺などがあった場合は、その人が住んでいた部屋は事故物件として報告されないということらしいんです。これ、ネット情報ですが。

ぼくが住んでいるマンションの数軒先に豆腐屋さんがあるんです。豆腐を食べるつもりは無かったんですが、そういうお店の人なら何か知っているかもしれないと思い、ぼくはその日の夕方頃に豆腐を買いに行きました。で、ぼくが住んでいるマンションで昔、自殺騒ぎとか無かったですかとお金を払いながら聞いたんです。そうしたら、豆腐屋さんの旦那さんは不審げな顔をしましたが、一言、知らないね、無かったと思うよ、とだけ答えてくれました。

さて、この日の夜もリトリバルに挑戦しようと思い、またベッドに横になって、呼吸、リラックス、エネルギー収集と段階を踏んでいきました。そして、また一人芝居によるコンタクトから入りました。

さすが2度目なので、この日は、少しコンタクトらしき成果がありました。

そのあたりをノートから拾ってみます。

どうして水を飲みに来るんですか？

のどが渇くから。

なぜ水を飲むんですか？

のどを乾燥させないように。

のどが乾燥するんですか？

のどが乾燥したらのどが痛む。

のどが痛んだらいけないんですか？

声が出ない。

声が出ないといけないんですか？

無言。

こちらへんが、ぼくがコンタクトできたところかなと思いました。つまり、この人が水を飲むのは夜中にのどを乾燥させないため。のどを痛めると声が出ない。こういうこと
は、ぼくの一人芝居では出てこないなあと思いました。で、もしかすると、声を使う職業
の人だったのかなと。

声を使う職業という歌手とかアナウンサーが思いつきませんが、その男の人は有名人ではあり得ない。とすれば、売れないミュージシャンなのかなあ、それとも築地のセリなどをする人かなあ、などとそのときは考えていました。

そうそう、深夜の水の音ですが、このリトリバルの挑戦を始めたらしなくなっただけです。不思議です。たぶん、ぼくとある程度意識がシンクロし始めたからなんでしょうかね。次の日もリトリバルに取り組みました。

この日も少し進展がありました。あとから思うとかなり重要なメッセージでした。ノートからその部分だけ拾います。

ぼくに伝えたいことはなんですか？

探してくれ。

何をですか？

バラバラ。

バラバラってなんですか？

バラバラ。

バラバラ死体ですか？

無言。

これだけですが、ここはコンタクト成功したと思えました。ただ、少し恐ろしかったですね。バラバラというから、ぼくはバラバラ死体を想像してしまいました。とすると、彼は殺されてバラバラにされてどこかに遺棄された。それがまだ見つかっていないので、探し出して事件として告発して欲しい。そう訴えているのかと思いました。警察でも探偵でも無いので、もうムリだわと思いました。

3日連続でリトリバルにトライしました。

この日の夜も少し進展がありました。またノートから拾ってみます。

あなたは歌手ですか？

わたしは歌手だ。

どんな歌手ですか？

わたしは歌手だ。

どんな歌を歌いますか？

バラバラ。

バラバラってなんですか？

無言。

ここは一人芝居か、コンタクトか、かなり自分でも迷いましたが、とりあえず、死者の言葉として書き留めました。ただ、バラバラという言葉がまた唐突に出てきたのが不思議でした。

ああ、言っておきますが、重要なキーワードは、ノートの別のページのまとめて書いておくようにしました。俯瞰できるようにしておきたいと思って。これがそのページです。見えますか？ あ、見えないですか？ あとで、ノート、手にとって見ていいですから。

4

連休の最終日には大学時代の友だちみんなと飲んで、連休明けには会社の人とかとの飲み会とかが続いて、数日間、リトリバルをしませんでした。ま、お酒のせいですが、平

穏な日が3日か4日続きました。

で、その週の金曜日ですが、ちょっとおかしなことがありました。

会社から帰って、コンビニ弁当を食べながらテレビを見ていました。夜の7時半ごろですかね。エントランスホールのピンポンが鳴ったので出ると、宅配便でした。amazonとかに何にも頼んでないしなと思いながら、玄関のドアを開けると、サガワのお兄さんがハイって本が1冊入っているような封筒を差し出しました。見るとぼくの名前じゃないんです。団体名なんです。ソシエテ・ド・シャンテール様って宛名でした。

いや、これ、ウチじゃないですって言ったら、お兄さんが、でも、201号室ですよねって言うんです、そうですよ、でも、うち、個人宅ですからって言ったら、ああ、そうですかって持って帰っちゃったんです。

サガワのお兄さんが帰った後、何か引かかるとなって思ってたんです。ぼく、大学ではフランス語取っていたんで、これはフランス語だなんてすぐにわかりました。ソシエテというのは社会とか団体とかグループみたいな意味なんです。でも、シャンテールってなんだろうなって思ってたんです。シャンテール、シャンテール。あ、そうか、シャントゥールかなど。つまり、歌手です。そこでドキッとしました。あの男が、コンタクトの中で自分

は歌手だと言った、その言葉と付合すると思ったわけです。

ソシエテ・ド・シャンテールを直訳すると、歌手の集まりみたいな意味になるわけです。すると、昔、ぼくの部屋が、そういう団体の事務所だったのかなと思っただんですが、隣の大学生は、ずっとOLさんのひとり暮らしだったと言っし。と、まあ、謎というか、よくわからないままで、その宅配便問題は終わってしまったんです。

でも、あとから思うと、ある種のシンクロシティだったんですよね。

その夜もリトリバルに挑戦しました。念入りに呼吸をして、天と地からのエネルギーを周囲にめぐらすメソッドもしっかりとやりました。そして、いつものように一人芝居から入りました。いつもだいたい、あなたはここにいますか？ という質問から始めます。当然、相手ではなく、90パーの確率で、ぼく自身が「いる」と答えるわけで、そこからのつもスタートさせていました。

この日も若干の進展がありました。またノートからその部分だけ拾います。

あなたは歌手ですか？

歌手だ。

どんな歌を歌っていたのですか？

シャンソンだ。

フランスの歌ということですか？

シャンソンだ。

バラバラとはなんですか？

バラバラだ。

どこにありますか？

埋めた。

どこに埋めたんですか？

庭だ。

どこの庭ですか？

無言。

こちらへんが進展したところですが、おそらくシャンソンというのは、夕ご飯の時にサガワのお兄ちゃんが持ってきた間違い荷物からぼくが連想して答えたという可能性もありました。

もう一つはバラバラです。庭に埋めた。これも、ぼくがバラバラ死体というイメージを持っていたので、そう言う連想から一人芝居したのかもしれない。でも、庭というのが、妙に異和感があって、むしろコンタクト成功した男の言葉かなとも思われました。もしもぼくの無意識の一人芝居なら、山の中とか言うんじゃないかなと思ったんですね。庭というのは、なんか意外な感じがしました。でも、考えようによっては不気味ですよ。もしも、本当にバラバラ死体だしたら、どこかの家の庭に埋められていることになるわけですから。

翌日は土曜日だったんですが、友だちと映画を観に行ったのと、翌日が、また1日コースのセミナーだったので、リトリバルはしませんでした。

そうしたら、久しぶりに午前3時、水の音が聞こえました。

最初に遭遇したときとほぼ同じです。ただ、こんどは金縛りにあいませんでした。水の音が聞こえたので、目がさめて、薄目を開いたら、男がゴクゴクと水を飲んでいました。うわっと思ったたら、目が全開になって、そうしたら男は消えていました。

たぶん、男は夜に水を飲む習慣があって、それを死後も続けているだけなんだろうなと

思いました。当たり前のことですが、なんとなく、ここまで何度も目撃して、しかも一人芝居かもしれないとはいえ、リトリーバルでいろいろ話しかけていると、なんか、他人に思えなくなってきたというか、相手の身になって考えてしまうというか、少し落ち着きのようなものが出てきたんですね。だから、なんか、男が夜中に起き出して、キッチンに行っ
て水を飲んで、またベッドにもぐり込むみたいなの、そんな情景がふと浮かんだんです。

日曜日は、待ちに待った1日コースの2度目の受講でした。ぼくは、セミナー終盤の死後探検の実験で、この水を飲む男について、参加者にコンタクトを取ってもらおうつもりでいました。何か、新しい、重要なことがわかるんじゃないかと期待したんです。

モーガンはアメリカに帰ってしまったので、メインのトレーナーは白原さんでした。

さて、夕方頃に始まった死後探検の実験です。ペアになった相手にコンタクトして欲しい人の名前と自分との関係を言います。マルマルという名前で祖母ですとか。それだけを頼りに、死者とコンタクトして、そしてその死者しか知り得ない情報を持ち帰ったら、死者とのコンタクトが成功したという証明になるわけです。

ぼくの場合、ま、相手の方、若い女性でしたが、本当に申しわけなかったんですが、事

情を話して、毎日午前3時に水を飲みに行ってくる黒いタートルネックのセーターの男です。ただ話して、コンタクトしてもらったんです。

そしたら、いや、ビックリしました。

その女性が瞑想からさめるとぼくにこう言ったんです。

その男の人は自分は歌手でシャンソンを歌っていると書いていました。それで、何やら小さな箱をしきりにその女性に見せようとしたというんです。その箱は真っ赤な箱で、白いリボンが巻いてあったと言うんですね。で、英語でブランド名みたいなのが書いてあるので、読もうとしたと。なかなかわからなかったけど、ついに読めた。バカラットと書いてありました。スペルはわかりますかと聞いたたら、ボーツとしていて夢のような中で見えたので、自信は無いですがと書いて、こう言いました。

B A C A R A T

確かにバカラットですが、そんなブランド、あったっけと最初は思いました。するとその女性が、あっ、バカラじゃないですかねって言ったんです。確かにフランス語だと最後のTは発音しないですから。スマホで調べてみたら、正しいスペルはこうでした。

Baccarat

バカラってバラバラに似ているなと思いました。

ということとは、このシャンソン歌手はバカラの小箱を庭に埋めたということになります。なんのためにでしょうか。もちろん、その小箱の中にはバカラの製品が入っていたんでしょう。バカラって言うとグラスを思い出しますが、その女性曰く、ネックレスや指輪も人気だそうです。比較的リーズナブルなんだそうです。

いずれにしても、このセミナーは大きな収穫でした。はからずも、シャンソン歌手だということと、バラバラというのはバカラの聞き間違いだということが証明されたと思いました。

それにしても、この若い女性、最初から映像が見えるなんて、すごいですよ。

あ、そうなんですか。

いま、横で白原さんが、あの方は初心者ではなく、トレーナー候補生の人なんだと教えてくれました。なるほど、トレーナーになる訓練の一環として受講生になっていたわけですか。どうりで。

次の日からはまた会社で、夜寝る前にリトリバルに挑戦するという生活に戻りました。っていうか、リトリバルしないとまずいという焦燥感があって、どうしようもなかったんです。

モーガンとか白原さんなら、一発でリトリバルしてしまうんでしょうけれど、ぼくごとき初心者の能力だと、毎日のコンタクトで、一つか二つの言葉がピックアップできれば大成功というレベルでしたので、いつまで続くんだろうという思いもありました。でも、とにかく、ヒントが見つかるまで、コツコツやるしかないなと思いました。しかも、リトリバルに挑戦した日は、午前3時になっても何ごとも起きないので、安心して眠れました。

さて、月曜日と火曜日の二日分のコンタクトの中から、男の言葉だと思われるキーワードだけ、ノートから拾います。

バカラ、贈り物、自分の庭に埋めた、その庭はここ。

たったこれだけです。まあ、お聞き下さっている皆さんも同じ気持ちでしょうが、かったるいというか、じれったいというか、まだるっこしいですよ。しかも、さっぱりわからないんです。だって、2階なのに庭に埋めたって言うし。もしかしたら、その男の実家の庭という意味かなとも思いました。

いずれにしても、その男はこのバカラの小箱にもすごいこだわっているんだということとは、よくわかってきました。

翌日、会社から帰ってきたぼくは、マンションの共同郵便受けであることを発見しました。重大な発見でした。

3階建てのこぢんまりとしたマンションなんです、狭い通りに面した真正面から見ると、全部の部屋の玄関が通りを向いています。右側から順に1号室から6号室まで並んでいて、ぼくの部屋は201号室なんで、通りから見ると2階の右端になるわけです。

1階はマンションの玄関で、ガラス扉を開くと共同郵便受けがあるエントランスになっています。そこからまたオートロックのガラス扉を開けてマンション内に入るようになります。

す。上に続く階段は、各階とも2号室と3号室のあいだになります。

1階だけは通路が外にむき出しになっていなくて、コンクリートの廊下みたいになっています。通りに面したほうが一面ガラス窓なので明るく、右奥、つまり101号室の向こう側に別棟になった小さな物置があって、掃除用具などが入っているようでした。

で、エントランスの共同郵便受けです。

アルミ製で下の段が1階、まん中が2階、上が3階になっています。この日、201と書かれた自分のメールボックスを開けようとしたとき、下の段の101のメールボックスの投入口にたまっていたままの郵便物に目が行ったんです。それまで手紙やチラシがあふれているとは思ってはいいてもそれほど気にも留めなかったんですが、そのときはなぜか気になって、投入口から出ていた郵便物の中からハガキを一枚抜いて見てみたくて。そうしたら、あの会社名が書いてあったんです。ソシエテ・ド・シャンテール御中って。

このあいだの宅配便のサガワさんは101と書いてあったのを、理由はわかりませんが、201と読み間違えたんだと、そのとき思いました。

ぼくは辺りを見まわして、だれもいないのを確認すると、そのハガキを読みました。名前も聞いたことのない女性歌手のライブの案内でした。白いドレスを着て、日本人ばなれ

した顔の女性の写真が印刷されていて、これまた聞いたことのないホールの名前が書いてありました。

ぼくは突然背中がゾクゾクとしました。なぜなら、そのハガキのライブ名が「安斉パトリシア、バルバラを歌う」だったんです。バルバラ、これが男の言っているバラバラと重なって思えたんです。

ライブの日程は今年の1月でした。ということとは、このハガキは去年の年末か1月はじめに届けられたものでしょう。

ぼくはハガキを投入口に戻すと、オートロックを開けて中に入り、101号室のほうに向かいました。ドアには表札も無く、ただ、101と書かれたプレートが取り付けられています。ドアの右側にはバスルームの小窓が高い位置についていますが、真っ暗でした。人の気配がなく、何か湿ったような気配があって、だれも住んでいないように思われました。ぼくは念のために呼び鈴を鳴らしましたが、数度鳴らしましたが、なんの応答もありませんでした。たくさんの郵便物が入ったままの郵便受け、そして人の気配の無い冷え冷えとした雰囲気の一部屋。長い間、だれも住んでいないのは明らかだと思いました。

ぼくは掃除用具が入ってある物置と建物の間をすり抜けて、隣のマンションとのあいだ

のスペースにからだを入れました。そこは外から入れないように高い金網で囲んであって、水道や下水道などのマンホールみたいなものが並んでいます。時間は7時ごろでしたが、まだ、ほんのりと明るく、マンホールの上を乗り越えるようにして進むと、すぐに101号室の小さな庭の横に出ました。そこも低めの金網で囲んで入れないようになっていて、小さな庭には背の低い雑草が生い茂っていました。庭に面したガラス戸のほうを見ました。クリーム色のカーテンがかかっている中では見えませんが、ベランダにもモノは何もありませんでした。

ぼくはまたエントランスホールに戻り、もう一度さっきのハガキを取り出して、そのライブの問い合わせ先の会社名を頭に入れました。

それからぼくは部屋に帰ると、ネットでその会社名を検索しました。

黒薔薇舎というその会社はすぐに見つかりました。シャンソンやカンツォーネなど、ヨーロッパ系の音楽のコンサートやアーティストの招聘をしている会社でした。手がかりになりそうだとは思いましたが、具体的にどうすればよいのか、そのときはわかりませんでした。それからバルバラを調べました。有名なフランスの女性シャンソン歌手だということがすぐわかりました。アルバムを何枚も出している世界的な歌手のようでしたし、来日公演

も何度かしているようです。十年以上も前に亡くなっていましたが、いまでも世界中で圧倒的な支持と評価を受け続けているとWikiに書いてありました。いずれにしても、シャンソンという言葉の付合にぼくは驚きました。

男がシャンソン歌手だったとしたら、このバルバラの歌を歌っていたということでしょうか。

だとしたら、バカラはなんなんだろう。もしかしたら受け取り手、つまりぼくのほうの問題で、バルバラもバカラもバラバラとして受け取っていたのかもしれませんが、つまり、ぼくはどこかでバラバラ死体だのといった、凄惨な事件と亡霊を無意識のうちに結びつけていた、そのせいなのかもしれません。

それから、ソシエテ・ド・シャンテールも検索してみました、残念ながらもわかりませんでした。

でも、男が住んでいた部屋は101号室にちがいないと、ぼくは確信しました。そんな直観がしたんです。ソシエテ・ド・シャンテールと男がどんな関係があるのかはわかりませんが、もしも彼がシャンソン歌手だったら、個人事務所名がこのソシエテ・ド・シャンテールだったのかもしれませんが。1階には庭があるのでバカラの小箱を庭に埋めたとい

う言葉と矛盾しませんし。

じゃあ、どうして彼は201号室に現れるのか。理由は一つです。それはぼくがいるからです。おそらく、ヘミシンクで練習していたために瞑想状態に入りやすくなった。言いかえればシータ波の脳波状態に入りやすくなった。そういう人間は死者に認識されやすいのではないでしょうか。それで、何かを伝えたい、あるいは影響を及ぼしたい、そう思った人はそういう気づきやすい人を見つけてやって来るのではないでしょうか。彼はぼくの真下の部屋に住んでいた。だから、ぼくを見つけるのは簡単だった。そういうふうには、そのときは考えたのでした。

前に一度、彼が夢の中に出てきたことがありましたよね。そのとき、ぼくの部屋は2階ではなく、なぜか1階でした。ドアからエントランスが見えたからです。つまり、それはあの亡霊の男の意識の反映がぼくの夢に影響していたからとは考えられないでしょうか。自分の部屋は1階だから、ぼくの夢の中でも1階が登場したのだと。

その夜のコンタクトで、さっそく聞いてみました。こんなやりとりがありました。それはまたしても謎を深めるばかりの結果となりました。

あなたは101号室に住んでいたのですか？

違う。

201号室に住んでいましたか？

違う。

101号室とはどういう関係がありますか？

無言。

なぜ201号室のぼくのところにやって来るのですか？

抱きたかった。

何をですか。

バラバラだ。

バラバラってバルバラのことですか？

バラバラだ、オレたちはバラバラだ。

という具合でした。何が何だか、結局、さっぱりわかりませんでした。

このコンタクト戦術ではムリかなと、そのとき初めて、諦めの心境になりました。

翌日の木曜、ぼくは101号室の庭に侵入することを決めました。会社から帰ってジーンズに着替えると、懐中電灯を手にはぼくは下に降りていき、まず隣の102号室の呼び鈴を鳴らしました。玄関から顔をのぞかせた大学生のような男性の住人に、201号室の住人ですが、ベランダから101号室の庭に大事なものを落としてしまったので柵を乗り越えて探しますので断りを入れました。いいですよと、男性は笑顔で答えてくれました。

マンション横からぼくは庭のフェンスを乗り越えました。ぼくの背丈より低いフェンスでしたので、楽に入ることができました。

時間は7時をまわったばかりで、夕陽の残りがあたりを薄ぼんやりと照らしていました。ぼくは懐中電灯で照らしながら、その狭い庭の雑草をかき分け、何かを埋めた痕跡はないか、丹念に探し始めました。101号室のガラス戸に背中を向けての作業でしたので、少しだけ怖い感じがありました。

それは比較的すぐに見つけることができました。クリーム色したビニール袋の端が土からのぞいていたのです。ぼくは素手でその周囲を掘り返しました。ちょっとだけ手が震えました。

姿を現したのは、デパートのロゴが印刷されたビニール袋でした。ぼくが袋の端を持ってグイッと引っぱると、まるで根菜を引き抜いたときのように、平べったい箱状のものが入った袋がすっぽりと抜け出しました。袋の中をのぞくと、さらに透明なポリ袋に入れられた、白いリボンが結ばれた黒っぽい箱が見えました。

部屋に戻ると、ぼくは袋から箱を出してデスクの上に置きました。真っ赤な平べったい正方形の箱でした。セミナーであの女性の方が描写してくださった通り、バカラのロゴが印刷された白いリボンで結わえられていました。ビニール袋で二重に守られていたせい、箱は新品同様に見えました。

予想していたとはいえ、やはりコンタクトした通りにバカラの小箱が見つかったのは、そうとうに衝撃的でした。

中を開けてみるのははばかれました。見なくても中はネックレスのようなものに違いなはずですし、とにかく、これまでのコンタクトの正しさが初めて物質的に証明されたこ

とで、ぼくはすっかり満足していましたし、昂揚もしていました。思わず、モーガン、すげえ、と、亡霊の男よりも、セミナーへの賛辞のほうが先に立ちました。

それからぼくは近所の中華料理店に夕ご飯を食べに出かけました。

8時ごろに戻ってきてメールボックスをのぞくと、A4大の封筒が入っています。取り出すとメール便で、中は書類のようでとても軽かったです。ところが宛名が間違っています。こんどは女性の名前でした。宛名シールには萩原凜香と印字されていました。住所は間違っておらず、部屋番号も201でしたから、前の住人だと思いました。郵便物は自動的に新しい住所に転送されていたようでしたが、メール便を扱う宅配便には転送手続きをしていなかったのかなと思いました。

ぼくは何気なく封筒の裏を返して差出人を見ました。そこに書いてある文字を見て、ぼくは本当に驚きました。心臓が止まるほどとは言いませんが、それに近いものはありました。なぜなら、そこには、バルバラ・ファンの会と書いてあったからです。

たてつづけにシンクロシティが起きている。そう思い、少し身震いがしました。同時に、何が何だか、さっぱりわからなくなりました。

ぼくはそのメール便を持って部屋に戻ると、あのバカラの赤い小箱の隣に並べて置きま

した。宛名シールをもう一度よく見てみると、住所、名前の下に小さく会員番号とあって6桁の数字が印刷されていました。この荻原さんという女性はバルバラのファンクラブの会員で、このメール便の中には会報のようなものが入っているのでしょうか。

さて、この意味するところはいったい何だろうと、ぼくは考え込んでしまいました。ひとつの可能性としては、この荻原さんという人がぼくの部屋の前の住人ではなく、下のソシエテ・ド・シャンテールのメンバーだということ。つまり、この間と同様、101と201の単なる間違いという可能性。

もう一つは、荻原さんは確かに前の住人で、偶然からバルバラのファンだったということ。そのとき、ふと、もう一つの可能性に気づいたんです。つまり、あの水を飲む男と荻原さんという女性が何かのきっかけで知り合いになり、バルバラのことを荻原さんに教えた。それでバルバラが好きになった荻原さんがファンクラブに入会した。こちらのほうがありえそうに思えました。同じマンションですから、何かのきっかけで知り合いになる確率は高いです。

ぼくは外に出て隣の202号室の呼び鈴を鳴らしました。あの若い男性が出てきました。ぼくが、間違い郵便が届いたんですが、ぼくの前に住んでいた人の名前は荻原さんという

人でしたかと聞くと、男性は、少し考え込むようにして、たぶんそんな名前だったと思いますと言いました。付け加えて、女性の友だちがリンカーって通路で大きな声を出してよく呼んでいたのを憶えていますと教えてくれました。間違いありません。荻原凜香はぼくの部屋の前の住人でした。

男性がドアを閉めようとした瞬間、ぼくはもう一問だけといって、こう聞きました。その荻原さんはいつ越していったんですか、と。彼はこう答えました。去年の9月か10月ごろですかねと。

ぼくは、なんか不意を突かれたような気がしました。ぼくはてっきり、ぼくが越してくる1ヶ月か2カ月前ぐらいに前の住人は越していったとばかり思い込んでいたからです。それが、去年の9月か10月とは。

なにかしら、核心に近づいているという予感がしました。ぼくはその荻原さんという女性に連絡をとってみなければと思いました。

11時ごろ、お風呂に入ってリラックスしたぼくは、バスタオルで頭を拭きながらバスルームから出ました。そこで、ぼくは文字通り、驚きのあまりひっくり返ってしまいました。膝が笑うと言うじゃないですか。まさに、その通りで、膝がカクカクして力が入らず、の

けぞるようにしてひっくり返ってしまっただけです。だって、ぼくのデスクにあの水を飲みに来る男が座っていたんです。いつもの黒いタートルネックのセーターを着て。じつとバカラの赤い小箱を見ていました。ぼくのいることなど気づいていないように、じつと座っているんです。

尻餅をついてのけぞったまま、ぼくは男の姿から目を離せずにいました。青白いとか、透明っぽいとか、そんなことはぜんぜんないです。本当に実際の人間がそこにいるのかわりません。ぼくの心臓はドキドキいって、背中はジンジンいっていました。

我に返ったぼくは少し冷静さを取り戻しました。そして、勇気を奮ってこう言ったんです。

それ、あなたのですか？

男はゆっくりぼくのほうに視線を向けると、砂の像が風で吹き飛ばされるように、何百万もの粒になって消えてしまいました。

ぼくはしばらく、素っ裸のまま、バスルームのドアの前に座り続けました。

それにしても、金縛りじゃないときでも、あんなふうにしっかりと見えるものなんですね、亡霊って。ほんとうにびっくりしました。

へえ、へえ、そうなんですか……。いま、となりで、白原さんが、振動数が低い濃いエーテル体だと肉眼で見えることもあるって言っています。……はい、へえ。ビデオとか写真には濃いエーテル体は映りやすいそうです。なるほど、そういうのがいわゆる心霊動画ってやつですか。なるほどね。

じゃ、ぼくは水を飲む男の濃いエーテル体を見たわけですね。

ということがあったので、その夜はコンタクトはやめて寝てしまいました。

7

翌朝、首のつけねが張ったような感じがして、少し痛みも感じました。前夜、のけぞるような形で尻餅をついたとき、首がむち打ちみたいになったせいかなと思いました。

会社の昼休みに不動産屋に電話しました。マンション名と名前を告げて、間違って届い

た荻原さん宛の荷物を引越し先に転送したいので新しい住所を教えてくださいませんかと聞きました。すると、個人情報で教えられないので、荷物は不動産屋のほうに持ってきてくれといえます。たぶん、そう来るだろうなって思っていたので、ぼくは用意していた返答を言いました。仕事が忙しくてそちらにいく暇が無いから、ぼくが出がけにコンビニで出すほうが楽なのでと。不動産屋はウーンとうなってから、こう言いました。ぜったいにダメなんです、と。もしも、あなたがストーカーだったらどうしますか。ストーカーじゃないって証明できますか。それに、荻原さんからは、たとえ肉親の名前を出されても絶対に引越し先は教えるなど言われていて、これ、大家さんからも言われている引き継ぎ事項になってますんで、と、そう言われてしまいました。

次にぼくは、あの「安斉パトリシア、バルバラを歌う」の主催の黒薔薇舎に電話をしました。若い女性が電話に出ましたので、ソシエテ・ド・シャンテール宛の間違い荷物が届くのですがと試みてみたところ、「うちからですか？」と言われて少し待たされました。そして低い声の女性に替わるところ言われました。シャンテールさんは事務所を閉鎖したので、うちからは何も送っていないはずですが、と。それで、ぼくが、いえ、おととい、宅配便が来ましたと嘘をいきました。「おかしいですねえ。気をつけます」と言って電話

を切ろうとしたので、ぼくはこう聞きました。好奇心からお聞きするんですが、どういう業種の会社だったんですか、ソシエテ・ド・シャンテールは、と。するとシャンソン歌手さんの個人事務所でしたよと言います。ぼくは、なんていう名前の歌手ですかと聞きました。女性は、少し口ごもりましたが、シンドウコウジさんという男性ですと教えてくれました。その方はもしかして亡くなっていますかとぼくが聞くと、どうしてそんなことまで聞くんですかと言いきまに電話を切られました。

あの男の名前はシンドウコウジだ。ぼくはそう確信しました。

会社の帰りに、ぼくは渋谷の桜ヶ丘にあるフランス音楽専門のショップに立ち寄りました。雑居ビルの中にある小さなお店でしたが、ネットで調べると、シャンソンではここがいちばん在庫が多いということでした。

ぼくはお店の人に、バルバラのCDが欲しいんですが、おすすめはどれですかと聞いてみました。お店の人は、ベスト盤をオススメしたいところですが、バルバラの場合、ファンになるとアルバムを1枚ずつ集めたくなるので、将来無駄にならないようにと、『Barbara Cahnte Barbara』という初期の作品を選んでくれました。輸入盤ということ
で、3500円近くしました。

部屋に帰るとぼくはコンビニ弁当を食べながら買ってきたばかりのバルバラを聴きました。大学でフランス語をとっていたのでフランス語自体には異和感はありませんでしたが、ピアノとベースとアコーディオンだけをバックに、女性のか弱さや強さ、悲しみと喜び、それを繊細に、ときにドラマチックに歌い上げるこの女性の音楽はぼくが初めて聴くタイプのものでした。1960年代の作品のようでしたが、なぜか懐かしさのようなものも感じました。

お弁当を食べ終わった後、ベッドにごろんとなり、ブックレットの歌詞を見ながらまた聴いてみました。感動しました。フランス語やってよかったと思えました。歌詞がわかるのとわからないのでは、感動がぜんぜん違うと思いました。

たとえば『gare de Lyon』という曲があります。これはリヨン駅というパリにある駅のことです。ひとりの女性が灰色一色のパリから太陽がいつぱいのイタリアに旅に出るため、リヨン駅で恋人と待ち合わせるといふ歌なんです。タクシーに乗ってリヨン駅に向かう途中のときめく気持ちを歌うんです。それで最後、「運転手さん、急いで、リヨン駅へ」で終わるんですね。うーん、劇的なんです。ぜひ、皆さんも聴かれるといいと思います。本当に素晴らしいです。

きのうの男の出現以来、なにかしら、男は24時間ここに居座っているんじゃないかという気がしたので、ぼくはじたばたしてもしょうがないという心境になっていました。だから、いまこのときも、この部屋のどこかで透明人間みたいにぼくを見ているのかもしれない、その男に向かって、「バルバラ、すごい、いいね」と言ってみました。もちろん、返事はありませんでした。バシッと音がするとか、ポルターガイスト現象があるかもと少し期待していたのでガツカリすると同時に、ほんと安心でもありました。

それからぼくはデスクに戻ると、こんどは、シンドウコウジをググって見ました。シャソンという言葉と一緒に探すとか出てくるはずと思いました。

ところが、何も出ず。カタカナを当てずっぽうに漢字に変えて検索しても、それらしき人の名は出てきませんでした。ほとんど無名にひとしい歌手だったんでしょうか。

その夜もリトリーバルのコンタクトをするつもりで、呼吸法を始めましたが、そのまま眠ってしまったようでした。ぼくは、明け方近く、異様にリアルな夢を見て目をさました。

ぼくが1階のベランダで椅子に座っているんです。それで何も無い庭に向かって歌っているんですよ。ぼくはギターを弾いていました。ギターなんて弾いたことがないのに、も

のすごくじょうずに弾いているんです。歌もものすごくうまいんです。のどからスーッと自由にいろんな声が出せる、そういう気持ちよさをからだ全体で感じながら歌っているんです。なんの歌かはわかりませんが、とにかくぼくは上手に歌っている。ところが、夢の中のぼくはぼくでなく、あの水を飲む男に変わっていたんです。ぼくは黒のタートルネックのセーターを着ていて、鼻がわし鼻で、自分ではなくなっていて、それにひどく驚いて、混乱して、そして目がさめました。

すでにカーテンの向こう側は朝日でまぶしく輝いているのがわかりました。

8

その日は土曜日でしたが、新製品発表イベントの応援で休日出勤でした。昼休みに黒薔薇舎に電話してみました。休みだろうと思っていました。電話に人が出ました。きのう

ソシエテ・ド・シャンテールの件で電話したのですが、どうしても大事なことなので言い張ると、昨日と同じ少し声が低めの女性に電話が替わりました。忙しいので短めにしてくださいと、まずのっけからイヤな感じで言われました。ぼくの部屋に間違っただけで訪ねてくる人もいるのでと、ぼくはまた嘘をつきました。まず、シンドウコウジさんって、漢字でどう書くのですかと聞きました。新しい新にフジの藤、さんずに告げるの浩にギョジの爾だそうです。御璽の爾ですと言われてもわからなくて、ギョジってなんですとか何度も聞き返したので、向こうもムツとしたようでした。どんな活躍をしていたんですかと聞くと、シャンソン喫茶に出て歌っていましたと。同時にフランス語学校と提携したシャンソン教室をやっていて、生徒さんが何人もいたようですと。で、黒薔薇舎はその生徒さんたちにも情報が届けばと、ライブやコンサートのチラシやハガキを送っていたということでした。いつ亡くなったのですかという質問には、たぶん去年の暮れぐらいで、詳しいことはわかりませんということでした。相手は電話をすぐにも切りたそうでしたが、最後にこれだけと、シンドウさんが出ていたお店の名前を教えてくださいと言っていると、ソレイユ・ノワールというお店で、もう閉店してありませんということでした。

今晚、会社から帰ったら二つのことをしなければと、ぼくは考えました。一つは、この

ソレイユ・ノワールというお店について調べることに。もう一つは、あのバカラの箱を開けてみることでした。ぼくの頭の中に、ひとつの決定的な仮説が生まれていたのです。それを確かめてみたかったです。

帰宅して調べるとソレイユ・ノワールのホームページは残っていません。「52年間、ありがとう」などのお別れの言葉が大きく書かれていて、その下には、「ソレイユ・ノワール、最後の夜 最後のパリ祭」と題された去年の7月14日のライブの様子が写真付きで掲載されていました。その下に、その夜、ステージに出た歌手達の一覧が載っていました。ありました、そこに、新藤浩爾の名が。ライブの写真を丹念に見ていくと、彼らしき姿も小さく1カットだけありました。ギターを抱えて椅子に座り、歌っています。わし鼻で、彫りの深い顔をして、七三ぎみに分けた髪をうしろになでつけて、黒いタートルネックセーターと黒いジャケット、茶のパンツという出で立ちでした。

ぼくは初めて見る水を飲む男の生前の姿に、息を飲むと言いますか、かなりドキドキして見入ってしまいました。

ソレイユ・ノワールのサイトには、新藤浩爾についてのそれ以上の情報はありませんでした。

それからぼくは、しなければいけないふたつ目のことに取りかかりました。

ぼくはあのバカラの箱に結ばれている白いリボンを丁寧にほどきました。それから、紙を破らないように注意してセロテープをはがし、真っ赤な包装をはがしました。中から深い赤色の箱が出てきました。ふたの上にはバカラのロゴが白色で描かれています。ぼくは蓋を開けました。白い薄紙の下に、ブルーに透き通る涙型というか、紡錘形というか、ほんとうにきれいなネックレスが入っていました。そして、案の定、一枚の手書きのカードを見つけました。ぼくはカードを取り出しました。フランス語で書かれています。

Pour Rinka, avec mon amour.

訳せば、リンカに、愛を込めて、となります。

ぼくの立てた仮説は当たっていました。このバカラのネックレスは新藤浩爾が荻原凜香に贈るために買ったものだったのです。しかし、それは贈られずに庭に埋められた。いったい何があったのだろうか。おそらく、ここに大きな心残りがあるのに違いない。ということとは、このバカラのネックレスを荻原凜香に渡せば、水を飲む男は思いを遂げ、フォーカス27に旅立ってくれるのだろうか。

ぼくは荻原さんという人に会おうと心に決めました。それで荻原さんに手紙を出すこと

にしました。

簡単な事情を書き、もちろん、怖がらせないように亡霊の話は伏せつつ、ぼくに連絡をくださいと携帯の番号を書きました。

皆さんは荻原さんの住所がわからないのに、どうして手紙が出せるのだらうといぶかってらっしゃるかもしれません。ぼくの住所に荻原さん宛に出せばいいんです。そうすれば、自動的に荻原さんの新しい住所に転送されるわけです。ああああ、って、白原さん、感心しすぎです。

転送っていうものにどれほど日数がかかるのか知りませんでした。少なくとも3日か4日はかかるのではないかと思いました。ですから、荻原さんから連絡があるまで、リトリーバルはお休みにしようかと思いました。ぼくの予測は正しいように思いましたし、コインタクトをとっても歩みはあまりにものろいし、荻原さんに会えば、すべてが解決するに違いないという確信もありました。

ところが、その夜から、ぼくは悪夢に苦しめられることになりました。水の音が聞こえたり、キッチンで男が水を飲む姿が見えたりとか、そういうことはおきませんでした。そのかわりに深夜から明け方にかけて、毎晩のように不思議な夢にうなされ続けました。

言葉では言い表せない、頭がおかしくなりそうな夢ばかりです。そして、ときどき、あの黒いタートルネックセーターの男が出てきて、歌を歌うんです。なんの歌かもわからないし、その歌をいま歌えと言われてもまったくできませんが、ギターを弾きながら歌うんです。そして、ぼく自身がその男になっていることにビックリして、目がさめるんです。

9

ぼくは新藤さんがどうやって亡くなったのかを知りたいと思いました。自殺なのか、事故死なのか、病死なのか。まさか、他殺はありえないとは思いましたが、その可能性も排除するわけにはいきません。

でも、どうしたら新藤さんの足跡をたどることができるのか、一生懸命に考えました。新藤さんの交友関係がわかればいいのですが、それをどうやって見つけるのか。

確実なのは、ソレイユ・ノワールというお店の関係者に聞くことでした。

その日は日曜日だったので、渋谷の道玄坂にあったというソレイユ・ノワールに行ってみました。そこは新築ビルの工事現場に変わっていました。

まあ、もともと期待はしていなかったのですが、ガツカリはしませんでした、そこで驚くべき進展があったんですね。

工事現場の隣に昔ながらの喫茶店があったんです。道玄坂にこんな古いたたずまいの喫茶店があるとは意外でしたが、その窓の内側に小さなチラシが通りの人から読めるように貼ってあったんです。そこにはこう書いてありました。

「ソレイユ・ノワールを偲んでこの地に足を運んでくださったシャンソンファンの皆様。ソレイユ・ノワールはもうここにはありません。それでも、このソレイユ・ノワールで育ったシャントウーズたちは活動を続けています。どうぞ、ソレイユ・ノワールの残り香を楽しみにいらしてください」

その言葉の下に、5月のスケジュールとあり、どこで誰が歌っているのかのリストがありました。13日の欄を見てみました。すると、偶然にもあの安斉パトリシアともう一人の女性歌手が、中目黒のジジというカフェで夜の8時からミニライブをすると書いてありま

した。ぼくはためらうことなく、行くことを決めました。

これがそのチラシです。あとでカフェでもらったものです。フランスっぽいですが、なんとなく。ま、エッフェル塔が描いてあるところは、お約束ということですが。

ぼくはいったん部屋に戻り、8時に着くようにまた出かけました。なぜかはわかりませんが、高揚感のようなものを感じて胸がソワソワしました。

ジジというカフェは中目黒の目黒川に面したオシャレなお店でした。フランスがテーマのようで、フランス映画のポスターやレコード、アンティークなどが飾っており、インテリアも黒と白と茶で統一されていて、とってもシックでしたが、ぼくが一人でも入れるカジュアルな雰囲気もありました。

すでにテーブル席は満員で、30人から40人くらいは入っていたと思います。入り口で、立ち見になりますがいいですかと聞かれ、はい、と答えると、ドリンク券1枚といろんなライブのチラシを渡され、3000円ですと言われました。

作り付けのステージのようなものは無く、店の奥にアップライトのピアノが置いてあり、その横にバーのカウンターチェアのような椅子が二つ置いてあり、マイクスタンドもありましたので、そこがステージになるのかなと思いました。

こんなにシャンソンが好きなのかと思うほど、次から次へと人がやって来て、ぼくはドリンク券と引き換えにもらったジンジャーエールをなめながら、すこしずつ奥のほうへと押しやられていきました。

やがて店内の明かりが落ち、反対にさっきのアップライトピアノのあるあたりが明るくなりました。赤のシンプルなドレスを着たショートカットの髪の細身の女性が出てきて、おじぎをしました。後ろのピアノの前には男性が座りました。

「トガシマリエです。今夜は心ゆくまでお楽しみください」とだけいうと、ピアノがゆっくりとメロディーを奏で始めました。ぼくはなんとという曲かもまったく知りませんでした。が、どこかで聴いたことがあるという不思議な気持ちもありました。

ぼくのフランス語能力では、最初のフレーズを聴き取るのが精一杯でしたが、こんなふうに聞こえました。

si tu t'imagines

si tu t'imagines

fillette fillette

si tu t'imagines

想像してみようよ、若い娘よ、若い娘よ。そういう歌い始めでした。おそらく、思春期の少女の恋心を歌った曲のようでした。あとで知ったのですが、これはジュリエット・グレコという女性歌手のヒット曲でした。

トガシマリエさんという歌手は低めの声で、アンニュイに、わざと音程をはずすような、不思議な歌い方をしていました。ぼくはすぐに心を奪われました。

1時間ほどでトガシマリエさんのステージが終わると、15分ほどのインターバルがあって、安斉パトリシアさんが登場しました。こんどはピアノに加えて、アコーディオンの伴奏者がついています。ぼくは彼女がバルバラを歌ってくれないかなと期待しました。とはいっても、まだアルバム1枚しか聴いたことがないのですが。

ところが、嬉しいことに、ぼくが買ったあのアルバムの中の曲、『Chapeau bas』から安斉さんは歌い始めました。シャポー・バというのは「脱帽」という意味です。素晴らしい歌詞で、主人公の目の前に広がる世界の美しさを称え、そしてあなたとわたしとがここにいることに対して、帽子をとって感謝します。そんな意味の歌です。

それから、おそらく、バルバラの歌ばかりを安斉さんは歌ったんだと思います。ぼくの買ったアルバムの中からも何曲か歌いましたし、バルバラの歌には曰く言いがたい特徴が

あるので、バルバラの歌ばかりと思ったのでした。

最後の曲の前に安斉さんはこう言いました。

「ソレイユ・ノワールは無くなりましたが、あの空間に息づいていたシャンソンへの愛はけっして失われません。では、今夜の最後の曲です。ル・ソレイユ・ノワール、黒い太陽」

そしてピアノが低音部の8ビートをリズムカルに奏で始め、歌が始まります。途中で、曲調がガラリと変わり、3拍子に変わって歌い上げます。それからまた8ビートになり、3拍子なりと、二つのパートが交互に繰り返されながら、曲はしだいに劇的に、暗く、悲しみをたたえて、終局へと向かうのです。なんて素晴らしい曲なんでしょう。最後の「*Je le désespoir.*」というところで、ぼくは思わず泣いてしまいました。胸の震えが止まらず、背骨がギューンギューン言って、ぼくは涙を流してしまったのです。

「*J'ai le désespoir.*」とは「わたしは絶望している」という意味です。力強いけれど、暗い歌なんですね。

ライブが終わっても、ぼくは動揺というか、心が落ち着かず、しばらく壁に背中をもたせかけて立っていました。あやうく、今夜の一番の目的を忘れるところでした。

立ち見の客のほとんどが帰ったところに、ぼくは控え室のほうに向かって歩いて行きました

た。すると、中からジーンズとTシャツに着替えた安斉さんが出てきました。ぼくが、すみません、とちよこんとおじぎをすると、笑顔で、はい、と答えてくれました。あのう、新藤浩爾さんについてお聞きしたいことがあるのですが、というと、一瞬、表情を曇らせ、それならマリエちゃんのほうがくわしいと思うと言って、ここで少し待ってと控え室に戻っていきましました。

それからまた安斉さんは出てくると、この先の控え室にどうぞ。マリエちゃんには伝えておいたからと言いました。

ぼくはお礼を言って控え室のドアをノックしました。どうぞというトガシマリエさんの声が聞こえました。

失礼しますと言って、ぼくがドアを開けると、狭い応接室のような部屋で、ソファにジーンズとブラウスに着替えたトガシさんが座っていました。トガシさんは、ぼくを見るなり、一瞬、驚いたような表情をして、それから「どうぞ」と向かい側のソファをすすめてくれました。

ぼくはソファに腰を下ろすと、お時間をとらせないように手短にお話ししますと、ぼくがソシエテ・ド・シャンテールがあった部屋の真上に住んでいること、荷物の配達間違

がよくあること、そして何よりも不思議な出来事が続くので、新藤さんのことが知りたい
と思っ
ているのですと、半分は嘘を、半分は本当のことを話しました。

トガシさんが不思議なことってなんですかと聞いたので、迷いましたが、夢に新藤さん
のような男性が出てくるんですとだけ言いました。リトリーバルと言ってもわからないと
思いましたので、おほらいをしてもらうつもりではいるんですがと付け加えました。

するとトガシさんは眉根をよせて、苦しそうな表情になりました。

それから短い時間でしたが、新藤さんの死についてこう教えてくれたんです。

新藤さんはシャンソン歌手としてはあまり人気は無かった。自作の曲を歌うことが多く
て、それが人気が出なかった理由だと。客にはシャンソンの名曲を聴きにやって来る人が
多いので、日本語の歌詞の自作曲をたくさん聴かされるといやなんだと。ただ、ルックス
がいいので、熱心な女性ファンが何人かいたようですねと。

だから、歌える場所は、店主が新藤さんのことを創造的だと気に入っていたソレイユ・
ノワールしかなくて、だからソレイユ・ノワールが閉店したときは、唯一のステージを失っ
たと言っ
てもものすごく落ち込んでいたそうです。

収入はシャンソン教室の授業料だけでは足りないので、実家の仕事も手伝っていたよう

です。実家は楽器店だったそうです。

トガシさんは新藤さんと年齢も近く、同じ音大を出ていたので、比較的、仲が良かったようですが、ソレイユ・ノワールが閉店したところから、新藤さんの様子が変だったので心配していたといいます。仲間の集まりには来なくなったり、シャンソン教室の生徒を授業中に怒鳴って泣かせるなどのトラブルが頻発して、提携先のフランス語学校からクレームが入ったという噂も聞いたそうです。

そんなとき、去年の12月、新藤さんが亡くなったという知らせを聞いたのだそうです。最初は自殺かとトガシさんは思ったそうですが、事故死だったそうです。実家のそばの道路でクルマにひかれて亡くなったそうなのですが、酔っぱらって道路のまん中に横たわっていたのを、何台かの車がひいていったのだそうです。だから、トガシさんは、自殺と言ってもいいかもしれないと言っていました。いろんなことに絶望して、お酒飲んで酔っぱらって、彼のことから、もう、どうでもいいやって、道のまん中に寝ちゃったんじゃないかなあと、トガシさんは言っていました。

新藤さんはバルバラが好きでしたか？　そうぼくが聞くと、大好きだったそうです。ただ、だれもがバルバラを好きだからと言いながら、新藤君の一番好きだった歌手はね、

ジャック・ブレルだったのよね、とトガシさんは言いました。

どんな歌手ですかと聞くと、伊達男でね、もちろん歌も詩も素晴らしいけど、男として渋くてかっこいいのと教えてくれました。そして、ぼくの頭を指さしてこう言ったんです。「ちょうど、あなたの今のヘアスタイルがジャック・ブレルそっくりよ。そんなふうにならなくて、七三に分けて、少しだけ前髪を額にかけて、あとはゆったりとうしろのほうに撫でつけて独特のスタイルなのよ。新藤君も、ジャック・ブレルのヘアスタイルを真似て、あなたみたいな髪型にしてたわ。あなたがここに入ってきたとき、新藤君の髪型とそっくりだったから、ビックリしちゃったわ」と。

10

日曜の夜からリトリーバルをお休みしたら、嫌な夢を見るようになったと言いましたが、

それはストーリーや理屈がある夢ではないんです。何か一つのことにとだわっていて、それが壁や水やなにやら物質のようになって、その中でグルグル回転したり、閉じ込められたり。すると見たことのない人達がたくさんやって来て、それも意味がわからないんですが、不吉な印象のことを延々話し続けたり。かと思うと、宇宙のただ中をあてどなく飛び回っていて、どこにも行くところがないので底なしの恐怖を味わったり。あるいはまた知らない人がまとわりついてわけのわからないことを話しかけてきて、その人に抜け出ることができないような奈落のようなところにつき落とされて、気が狂いそうになるほど恐ろしかったり。

そして前にも言いましたが、知らぬ間に自分が新藤さんになって歌を歌っているんです。リトリバルを始めようかと思いましたが、荻原さんから連絡が来るはずだ、それですべては終わるはずだと思いましたが、リトリバルはしませんでした。

その荻原さんから電話があったのは金曜日でした。手紙を出してからほぼ1週間後です。ただし、手紙に番号を書いた携帯ではなく、会社のほうに電話があったのです。きっと、ぼくが手紙で嘘をついていないかどうか、確認するためでもあったのだと思います。

ぼくが手紙に書いたのはこのようなことでした。

まず、ぼくが、この4月から201号室に住んでいること。念のために学歴と勤めている会社のことも書きました。いちおう一部上場企業なので信用してもらえらると思いましたが。そして隣室の男性の話と間違って配達されたメール便から、荻原さんの名前を知ったこと。新藤さんという方から荻原さんに宛てた小包が届いたこと。これは嘘でした。新藤さんは事務所をたたんで引越してしまっただが、ときどきぼくのところにやって来て荻原さんのことをたずねられるので困っている。解決したいので、相談に乗ってもらいたい。これも嘘でした。いや、ときどきやってくるのは本当ですが。そして、新藤さんには絶対に知られないようにするので、相談にのってくださいと書いたのですね。

ぼくは新藤さんが亡くなっていることも、亡霊が現れることも書かず、あたかも彼がまだ生きているように書きました。荻原さんが越していったのは9月から10月にかけて。そのころは新藤さんは生きていました。もしも、荻原さんが新藤さんと連絡を断っていたら、新藤さんが亡くなったことは知らないはずですよ。

新藤さんの亡霊のことを書けば、おかしい人と思われるに会ってはもらえないだろうと思いましたが、となると、生きている新藤さんがぼくのところにやって来て迷惑なのでとしたほうが会ってもらえるのではないかと思っただけです。

さて、ぼくの立てた最新の仮説とはこのようなものでした。

不動産屋に荻原さんの住所をたずねたとき、不動産屋は住所を教えるのを頑強に拒んだわけですが、そのとき、ストーカーって言葉を何度も口にしたんですね。それに荻原さんが、肉親だと言う人にも絶対教えてはいけないと言ったと。しかも大家さんからの厳命でもあると。それで、なんか変だなと思ったんです。

そこでこう考えたんです。もしかしたら、新藤さんは荻原さんに片思いをして、それでストーカーまがいのことをしていたのではないか。それで、荻原さんは引越したのではないか。そう考えたんです。

だから、あのバカラのペンダントは失恋の証し、屈辱の印なんです。なんで捨てずに埋めたかは知りませんが、もしかしたら、叶わなかった恋を葬るという象徴的な行為だったのかもしれない。

電話の荻原さんは、何か裏があると思っているのかうたぐり深く、返事の一つ一つにタイムラグがあるようでした。女性にしては低い声で、とつても落ち着いた大人の女性という印象でした。

指定の場所にうかがうのでぜひお会いして相談にのって欲しいと言いました。このままだと、せっかく引越してきたのに、また別のところに越さなきゃいけないはめになりそうだと、ま、自分でもこんなに嘘が上手だったかと思うほどでした。

荻原さんはさんざん迷った末に、明日の土曜日に代々木公園でお会いしようと言ってくれました。他人に聞かれたくない話なのでお店より外で話したいということと、代々木公園なら中の様子をよく知っているのでということでした。午後は用事があるから午前がよいというので、園内に東京オリンピックの選手村に使われた家があるのですが、その前で11時に待ち合わせました。ぼくは赤いロードレーサーの自転車に乗っていくので見つけたら声をかけてくださいと言いました。

その夜、ぼくは激しいほどの渇きに襲われ、目をさしました。まるで夢遊病のようにベッドから降り、キッチンまで行ってグラスに水を注ぎ、一気にゴクゴクとのみほしました。ベッドに戻って目覚まし時計を見たら、ちょうど午前3時でした。

それから、混沌としか言いようのない夢に翻弄されるようにして目がさめました。知らない人や知らない場所が出てきては、わけのわからないことを言い立てます。日本語ですが、意味が通りません。胸がドキドキして、そして気がつく朝の8時でした。

リュックに荻原さん宛のメール便と、バカラの小箱を入れて、ぼくは自転車に乗ってマンションを出ました。これぞ五月晴れという天気の良い日でした。

10分もかからずに待ち合わせ場所に着きました。約束の11時までにはまだ15分近く時間がありましたので、ぼくは、待ち合わせ場所から一番近いテーブルとベンチを確保し、自転車がよく見えるようにテーブルに立てかけました。

10分ほど遅れて荻原さんはやって来ました。この場所は代々木公園の原宿門から入ってすぐのところであり、人通りが多いのですが、なぜか荻原さんを入混みの中から見つけ出すことが出来ました。なんとなく、イメージしていた女性そのままだったからでした。女性にしては背が高いほうで細身、ブルーっぽいチェックの柄のワンピースに、ブルーの薄手のカーディガンをはおり、クリーム色のトートバッグを肩にかけ、クリーム色のデッキシューズをはき、ぼくのほうに向かってずんずん歩いてきます。髪はストレートで肩より少し下のあたりでそろっていました。近づくにつれ、少し目尻の下がった大きな目、細い鼻梁と厚い唇の、色白できれいな人だということがわかってきました。

ぼくの赤い自転車を目がけて向かってきた荻原さんはぼくに気づくと、一瞬、足を止め

て、少し驚いたような表情を見せました。ぼくは立ち上がり、10メートルほど離れて立つその女性に「荻原さんですか」と声をかけました。荻原さんは小さくうなずくと、周囲を注意深く見まわしてから、近づいてきました。ぼくはおじぎをして自分の名前を言い、どうぞ、座ってくださいと言いました。売店で飲み物を買ってきますが何がいいですかと聞くと、大丈夫です、いりません、それよりも、早くお話しをすませましようという硬い表情で言いました。

ぼくらは木のテーブルをはさんで向かい合せて座りましたが、何とも言えない感慨のよ
うなものがぼくの胸いっぱいに広がりました。なぜか泣きたくなり、ぼくはせきをしてご
まかしました。

荻原さんがまず口を開きました。

新藤さんとグルになって何かをたくらんでいるのなら、すぐに警察に言いますから。そ
ういうことは絶対にはずすよ。できれば、新藤さんと無関係だとなにかで証明してく
ださい。そんなふうにはけんか腰というか、一方的に言われました。ぼくは迷いましたが、
先に本当のことを打ち明けたほうがいいと思いました。ぼくはこう言いました。

実は新藤さんはもういません。亡くなりました。去年の12月に。電話では嘘をついてす

みませんでした。そう言ってぼくは頭を下げました。

荻原さんは左手で口をおおって、目を見開きました。

うそでしょ。

本当です。交通事故だそうです。シャンソン歌手のトガシマリエさんから教えてもらいました。すみません。亡くなったと言ったら、ぼくの話を信じてもらえないと思ったものですから。

なんのことですか。あなたの話って。と、荻原さんは左手を口に当てたままかすれた声で聞きました。

201号室に越してきてから、不思議なことが起こって。夜中にへんな物音が聞こえたり、夢に知らない人が現れたり。それはいつも同じ人で、わし鼻で大きな目をして、いつも黒いタートルネックセーターを着ていました。

荻原さんがゴクリとツバを飲んだのがわかった。口を押さえたままの左手が震えだした。それとわたしになんの関係があるんですか。そう、荻原さんは震えながら言いました。

ぼくはリュックの中から、メール便を出して、間違って配達されましたと言って、テールの上に置きました。それから、またリュックの中に手を入れて、バカラの赤い箱を取

り出しました。包装をきちんとし直して、リボンちゃんと結び直しておきました。

これを受け取って欲しいんです。

なんですか、これ。と荻原さんは左手を口からようやく離してひざの上に置きました。

新藤さんがあなたに贈るつもりで用意していたものです。これをもらっていただければ、新藤さんは成仏するのじゃないか、そう思うんです。

申し訳ないですけど、そちらで処分してください。受け取れません。と荻原さんはまだ動揺に唇をこまかく震わせながら言いました。

新藤さんのストーカーにあっていたんですか。ぼくがそう聞きました。

そうです。荻原さんはうなずきました。

しつこくて、しつこくて。耐えられなくて、新藤さんに気づかれないように引越したんです。と荻原さんが言いました。新藤さんが実家の手伝いに行つて事務所にやつて来ない月曜日を狙つて、業者さんに無理を言つて短時間で引越したんだそうです。もちろん、警察にも相談していて、不動産屋も大家さんも承知の上での引越したそうです。

あのひとは、自分が好きになった女性は自分のことを必ず好きになるものと思い込んでいます。自分が好きになったからには自分のものだ、言うことを聞けという、そうい

う人なんです。と萩原さんは言いました。

どんなひどい目にあっただんですか、と聞いてみました。

すると、こう言いました。

去年の春ですね。下の階にシャンソン教室ができたと聞いて、月にわずか2回ですが、習いに行っただんです。以前からバルバラというシャンソン歌手が大好きだったので、新藤さんが先生です。そのうち、わたしに好意をもったのか、しつこくデートに誘われるようになりました。そのとき、つきあっている人がいたので、そのことも正直に言っただけで断っていったんですが、そのうち、歌を作るようになったんです。わたしに捧げる歌だと言って、それを、あの庭に座って、わざと2階のわたしに聞こえるように歌ったり。歌詞と楽譜を郵便受けに入れたり。そのうち、だんだんエスカレートして、わたしのデートを尾行するようになりました。尾行の途中で、わざわざわたしに見えるように姿を現したり。勤務先だけは知られないように注意していましたが、ソレイユ・ノワールというシャンソン喫茶、知っていますか？ あそこがつぶれたところから、行動がどんどんおかしくなっていくんです。

ぼくは、新藤さんが101号室にソシエテ・ド・シャンテールの事務所兼シャンソン教

室を開いたのが去年の春だったことを初めて知りました。何年も前からそこにあったもの
と思っていました。もしかすると、前途に希望を抱いて教室を開いたものの、それからわ
ずか数ヶ月後にソレイユ・ノワールが閉店してしまった。新藤さんは自分の未来が描けな
くなった。それで行動も病的になっていったのかもしれませんが。

新藤さんがもう耐えられないと引越しを決断したのは、どこから合鍵を手に入れた
のか、夜、気づいたら新藤さんが部屋にいたことがあったからでした。

水の音で荻原さんは目がさめました。なんだろうと飛び起きたら、キッチンで新藤さん
がグラスで水を飲んでいたので、何をしてるんですかと叫ぶと、水を飲んだら落ち着
いたんでもう帰る、興奮していたんだ、何もしていない、悪かった、そう言って出て行っ
たそうです。

その夜以来、荻原さんは自分の部屋に帰っていないんです。ずっと、ウィークリーマン
ションに泊まって、必要なものは友人に頼んで取って来てもらったそうです。引越しし
たのは、それから10日後というあわただしさでした。犯罪の犠牲になるのではないかと恐
ろしくてたまらなかったと言います。

そんな人からの贈り物を、ありがたうと言って受け取れますか。そう荻原さんは言いま

した。まだ唇が震えていました。

ぼくはバカラの赤い箱を見ながら考え込みました。すると、荻原さんがぼくに向かってこう不審げな表情で言ったんです。

あなたも爪をかむ癖があるんですね。新藤さんも追い込まれると、そうやって爪をかんでいましたよ。

ぼくは自分が爪をかんでいるという意識が無かったので言われてビックリしました。実際、ぼくは左手の小指の爪をかんでいました。ぼくにはそんな癖などなかったはずなのに。そのとき、ぼくの首のうしろのほうに湧き出たゾクゾクとした激しい寒気が、振動のようになつてからだ全体を支配しました。言いかえれば、何かがぼくの中から激しく震えながら入ってきたのです。

気がつくとぼくは荻原さんをじっと見つめていました。荻原さんは目を見開き、からだをこわばらせていました。そして、だれかがこういうのが聞こえました。

リンちゃん、好きだよ、会いたかったよ。

誰が言ったんだろうと、振り返ろうとしましたが、金縛りの時のように、体の自由がききません。すると、また、どこかでだれかがこう言うのが聞こえました。

リンちゃん、なんでオレたち、バラバラになったんだよお。

荻原さんはぶるぶる震えながら立ち上がり、後ずさろうとしましたが、椅子がじゃまになってうしろにひっくり返ってしまいました。ぼくのからだはまだ自由がききません。

荻原さんは這いつくばるようにして、ぼくからはなれていくと、やがて立ち上がり、猛然と原宿門のほうに駆けだしていきました。荻原さんに向けられていた周囲の人たちの好奇の視線が、サッとぼくに向けられました。

ぼくは貧血の時のように視界が暗赤色に染まり、意識が遠のきそうになり、テーブルの上に広げた腕に頭を乗せて突っ伏しました。

しばらくそのまま、じっとしていました。

やがて5月のポカポカした陽光がぼくを包んでいるのがわかりました。暖かくて、とても気持ちがよくて、ぼくは顔を上げました。いつもと変わらない土曜日のお昼の代々木公園が目の前にありました。

ぼくはテーブルの上の荻原さん宛のメール便とバカラの小箱を取り上げると、リュックに入れ、そのリュックを背負うと自転車にまたがりました。

途中、公園の大きなゴミ箱の前を通りかかるとぼくは自転車をとめ、リュックの中から

メール便とバカラの小箱を取りだし、ゴミ箱の中に放り入れました。メール便は燃えるゴミに、バカラの小箱は燃えないゴミのほうに。

11

皆さん、どん引きしてますね。

これがホラー小説なら、ここで終わったほうが余韻が残っていいと思うのですが、これは分かち合いなので、もう少し、話させてください。

皆さんが思ったように、ぼくは新藤さんに憑依されていたんです。

いまはどうなったか、気になりますよね。まだ憑依されているのかどうか。結論から言いますと、新藤さんの一部は、まだぼくの中にいます。

お願いですから、またどん引きしないでください。そこの方、いま、うしろにひっくり

返りそうになりましたよ。

あれから3カ月少したちましたが、いろいろ本を読んだり、白原さんと話をしたりして、ぼくなりに憑依についての考えも持てるようになりました。

確か、ルドルフ・シュタイナーだったと思うんですが、魂と霊の概念を分けています。つまり、魂の上位に霊が存在するんです。

肉体があり、エーテル体があり、アストラル体があり、そして自我がある。この自我が魂にあたります。そしてその上位にあるのが霊です。

肉体から魂までのセットが人間です。

魂は水のようなもので、ひとつのグラスに入っているものを、二つのグラスに分けて入れることもできるのではないかと思うんです。どちらも同じ水ですが、容器が違うので違う水になってしまいます。でも、それを元に戻すと同じ水ですし、それを10個の容器に入れることもできる。とすると、そのアイデンティティはどうなるのかということになりますよね。ぼくが思うに、その上位の霊がそのアイデンティティを担保しているんじゃないでしょうか。それはハイアーセルフと言ってもいいんですけど。

おそらく、新藤さんが亡くなったとき、80パーセントくらいの魂がフォーカス27に行っ

たんではないでしょうか。残り20パーセントが、いわゆる未練、つまり地上でしか解消されないエネルギーとして残り、エーテル体とともに地上に残ったわけです。亡くなったらエーテル体も地球にお返ししなくてはいけなかったのですが、盲目的になったままの20パーセントの新藤さんが本体からちぎれて残ってしまった。その20パーセントをリトリバルして80パーセントと合体させてあげないといけないのですが、それをするのはわたしたち生者の仕事でもあります。知っての通り、迷える魂にとっては、物質的存在であるわたしたちのほうが視界にとらえやすいからです。

で、わたしはいま、リトリバルについては、かなり上達しています。あれからもう2回、1日コースを受けていますし、白原さんと個人的にコミュニケーションも取っています。瞑想中に新藤さんと映像も含めたコミュニケーションができるようになってきました。それで、ぼくは確信するんですが、さらに10パーセントがフォーカス27に帰っていき、いま、ぼくのそばにいらっしやるのは残り10パーセントの新藤さんです。その魂の望みは何かというと、曲を残すということです。実は、もう少しでその楽譜も完成します。ぼくが新藤さんとコンタクトをとって書き続けた楽譜です。おそらく、それが終了すると、新藤さんの魂のすべてはフォーカス27に吸収されます。

ほんとかなあ、という顔をしていますね。どうしてもダメなときは、白原さんが強制退去させると言っていますので、安心してください。

それからテクニカルなことです。死者とのコンタクトにあたっては、ひとつのシンボルによって多くの意味を伝えようと死者はしているらしいということです。

たとえば、水を飲むということが、彼がのどを大事にする歌手だということと、荻原さんの家に忍び込んだときの行動の二つを同時に示していました。

バラバラは、バカラであり、バルバラであり、そして新藤さんが感じたバラバラになっ
てしまったという喪失感、断絶感でした。

おそらく観念の塊として死者から生者にメッセージが届くとき、ぼくら生者は多義的な音のアマルガムとしてそれを受け取るのではないのでしょうか。ですから、それをぼくらは多義的、多面的に展開して解読してあげる必要があるのかもしれない。

さて、憑依ということをもう少し突っこんで考えると、実はそう珍しいことではないのではないかと思えます。

たとえば何かの考えに囚われてしまっているという状態。それも一種の憑依じゃないでしょうか。自分で自分の思考がコントロールできないというのは、憑依とどう違うのかと

思います。自分の魂の一部に他者が入り込んでくること。その他者を外在するものとして認識できないこと。それが憑依だとしたら、その他者とは生者であってもかわりないはず。そう思うと、わたしたちの魂にはいかに多くの生者の思念や言葉が憑依していることか、そう思ってしまうんです。

たとえば今回のことも、萩原さんを探しだして会うために新藤さんがぼくをのっとなって利用したとも外形的には考えられるわけです。でも、いったい、どこからどこまでが新藤さんの憑依による意図や行為であり、どこからどこまでがぼくのものであるかは、ぼく自身にもよくわかりません。ぼくらの自我というのは、それほど頼りないというか、あるいは境界があいまいなものなのかもしれません。

予定より時間をものすごくオーバーしてしまいましたね。すみません。参考になりましたでしょうか。

いずれにしても、午前3時にやってくるお客様には気をつけたほうがいいですよ。ご静聴、ありがとうございます。

(太田 穰)